

※「」からお届けするのは、ユズちゃんが書いた小説……のような何かです。あの「」とか新人賞に応募したようですが、文字数の規定などを大きく逸脱しているため余裕で落選しました。
「」承の上で読み進めてくださいませ。

ヘルハース・ロード
冥終黙示録～輪廻を外れし咎人どもの宿業～
カルマ

著者：ユズ PN：夜叉竜滅
やしゃりゅうほろび

登場人物

「」
我・現世では『ユズ』といつ偽りの仮面で生きているが、真名は違う。

理を超越した魔族である我の真名は『夜叉竜滅』。

・全ての時空・並行世界の頂点に立つ『終極の霸王』

・固有武器は『黒翼の審判アグレア＝ナハト』↑黒い双剣

・白皙の肌にしなやかな手足。長身瘦躯(あと乳がでかい)

・不渝いな双眸のうち、深紅の方は『神滅の魔眼・零式』
オッド・アイ
シメイ・マガニ
ゼロジキ

・羽織つているのはマントではなく『黒龍の飛翔』
〔ティアマト ヒジョウ〕

・前世からの絆で結ばれた眷属がいる(現世では兄)

眷属…現世では『ゴズ』のおにいちゃん。だが実際は、魔族である我的忠実な下僕にして眷属。困つた」と、我に思いを寄せている。

・一見軟弱だが、我のために身を投げ出せる男らしさを持つている

・その優しさは異能『愚者^{クラウン・フェルディア}の気まぐれ』の名を持つ。

・我と絆の^{ブラッディ・チーン}血色鎖で結ばれている。赤い糸などより強固なため、

我の絆は冥府だろうと来世だろうと絶たれる」とはない。

(編集さんへ 終章からなのは仕様です。我の物語に始まりなど不要
……その気概を汲み取るがよい)

終章…黎明に寄り添いて

静寂だけが、心地いい。

天使の喇叭も悪魔の凱歌も、消えうせて。

ひたすらに凧いだ空気が、我的頬を撫でる。

「……終わった、か」

長く険しい最終戦争に終止符を打ったのは、『終極の霸王』たる我だ。神をも屠る一対の黒剣『黒翼の審判アグレア・ナハト』を振るい、闇を祓い、光を陰らせ。

希望と絶望に縛られた、腐敗せし秩序を断ち切つたのだ。

「我はこの戦いを忘れない……失われた命を、一度と還らぬ魂を。全てを背負い、世界を統べる。支配者としての業を果たすために、この命を使おう」

呪われた運命に思い馳せ、瞳を伝うのはなんだ？ 泣などどうに涸れたはずなのに。どうして胸が苦しいのか。

勝利の美酒に酔いしれることすら、我には許されないのか？

「終焉は美しく、また儂い……無限の虚無は、宿業への罰か……」

そう呟いた我の肩に、そつと手が置かれた。

地上にはもう、我の他に一人しか存在していない。

そう、我と運命の鎖で繋がれた、奴だ。

「眷属……なんだ、我に軽々しく触れるな」

現世では我の兄として生まれてきた、『魂の片割れ』だ。

フランシス・オブ・ゼーレ

流石は我的片翼と言つべきか、最終戦争を生き残り今もここにいる。そして、今は亡き太陽よりも眩い笑顔で、我にこりついた。

ユズ、うちに帰ろう。

「む……我はユズではない。だが、まあ……そうだな。これからは我と汝しかいないのだし……不服だが、共に生きるのが道理だろ。さて……まずは新たな人類を増やすべく、受胎の儀に励もうか。いや、我は望んでないのだがな？ 汝がそういう眼をしているからな？」

そう、我はそんなこと欠片たりとて望んでいない。だがまあ、それ以外に娛樂もないことだし……眷属に悪感情を持ち合わせているわけでもない。

魔族である我だが、アダムとイブの真似事をするのも悪くないだろ。どうせこの男は、我なしでは生きていけぬのだからな！

そうして我らは、人類の祖となつた。子孫を軽く八兆人こしらえた。我らは神話となり、いつまでも傍らに寄り添つて生涯を終えた。

そして後世に語り継がれし我らの神話、それを記した書物こそ。

——『冥鳥默示録』である。

了

(「の作品は落選してしまったが、年齢が余りにも若い」とと独特なセンスを買われ、編集者が興味を持つたようだ。そうしていくつかのインタビューが行われた……その一部を抜粋しよう)

Q・もしもうえたら、賞金の使い道は?

A・うむ……眷属が欲するものを与えるだろうな。それで笑顔になつてくれたのなら、僥倖である。